

8月19日 日曜日

フリータイム

団員たちはそれぞれ民泊家庭の家族と過ごしました。

8月20日 月曜日

マルクスブルク城見学・アスレチック



中世の兵士の甲冑が
展示しており
鉄仮面をかぶることも
出来ました

ボッパルトの青少年
とスポーツを通じて
交流しました



8月21日月曜日

ポツパルトにお別れ・ハイテルベルク見学

ポツパルトの皆さんとのお別れ
お世話になりました



最後はハイテルベルクへ
きれいな街並みがとても有名です



ドイツへの別れを惜しみながら
ハイテルベルクを歩きました

8月22日月曜日

帰国・出迎え式



フランクフルト空港を出発し



一週間ぶりに成田空港へ



これからも姉妹都市交流を
続けていきたいと思います

△ 派遣報告

(1) 派遣全体を通じて



姉妹都市ボッパルトを訪ねて

青梅市長 竹内俊夫

青梅市とボッパルト市とは、昭和40年9月に姉妹都市提携を結んで以来、姉妹都市として47年間の友好親善交流の歴史をもっています。中でも、隔年で実施している青少年友好親善使節の相互訪問事業は、姉妹都市交流事業の中心的な事業です。

このたび、私は、8月15日から22日まで、第14回青梅市青少年友好親善使節団の団長として、青梅市在住の中学生10人と高校生3人、引率2人の総員16人で、ボッパルト市を訪問してまいりました。私にとっては、これが4回目の姉妹都市訪問になりました。

今回の訪問にあたり、ボッパルト市では、ベアシュ市長をはじめ、多くのボッパルト市役所の職員やボッパルト・青梅友好協会の皆様方をはじめとするボッパルト市民から、大変心のこもったおもてなしを受けました。特に私のホームステイを引き受けてくださった、友好協会会長のロース家には、前回に引き続き、大変お世話になりました。

青梅の青少年たちは、一人ずつボッパルト市民のお宅でのホームステイを経験し、それぞれの家庭でドイツの家庭料理やドイツ文化に触れることができました。また、事前研修で学習したドイツ語で一生懸命話しかけている姿は、とても微笑ましいものでした。団員は、言葉のあまり通じないドイツで、どうしたら自分の意思を伝えられるのかを一生懸命に考え、一つ一つを試しながら交流を図っていました。はじめ、団員は、緊張のあまり強張った表情をしていましたが、笑顔が最大のコミュニケーション手段であることに気付いたようであり、次第に表情豊かに接することができてきました。

私たち使節団は、ボッパルト滞在中、市内の史跡や教会・古城の見学などを通じ、ボッパルトの豊かな歴史、文化、自然に触れることができました。ボッパルト市内では、ローマ時代の史跡と民家が混在して建っており、建物も石造りで歴史ある建物が現在でも使用されています。家々の窓辺はカラフルな花で飾られていて、賑わいもあり、ごみのポイ捨てもなく、清潔さにあふれ、青梅市にとって学ぶべき点が多いと感じました。

使節団員は、ボッパルトでの友好親善パーティで披露するために、青梅市民の歌やドイツ語の歌、よさこいソーランの練習に熱心に取り組み、ボッパルトでは、ドイツの青少年と一緒によさこいソーランを踊るなど、歌や踊りの交歓で大変盛り上がりました。

ドイツ語の通訳として、ボッパルト在住日本人の正子・オレガンさん、美穂・ロースさん、みどり・ロースさんの3人と、アルフレッド・ロースさんにきめ細かく対応していただきました。

また、ボッパルトの民泊家庭の方々の温かい心遣いもあって、団員は、ボッパルトの青少年と親善交流を深め

ることができました。

ボッパルト市民の皆さんの温かいおもてなしに、これまで多くの方々が積み重ねてこられた姉妹都市交流の歴史の重みを感じた1週間でもありました。

若い団員たちは、温かく親切なボッパルト市民の御厚意のおかげで、元気に過ごすことができ、友好親善使節団としてその役割を立派に果たすことができました。ボッパルト滞在中の体験は、団員にとって、大きな財産になったことと思います。

私たち16人の団員は、事前研修から派遣期間までを通じて得た体験を大切にし、このような機会を与えられたことに感謝し、その成果を周囲の方々に伝え、姉妹都市交流の輪を広げるなど、今後の活動に生かしていきたいと思います。



私は今回、青少年友好親善使節団の団員として、ドイツ・ボッパルト市へ訪れる機会を頂きました。

ボッパルト市へ訪れる前の私は、自分の思った事を相手に伝えるのをためらってしまう事がありました。研修のときに「ドイツ人は言いたい事や思った事は、はっきり言わないと分かってもらえない」という事を知り、今回の派遣を機に自分の意思を伝えられるようになりたいと思いました。

ボッパルトに到着した時、ホームステイ先の家族が私に英語で話しかけてくれました。ドイツ人も英語の会話は日本人程度で、単語を並べて話せば伝わると聞いていたのですが、いざ話をしてみるとアメリカ人のようにぺらぺらと話しかけられ、焦ってしまいました。私は英語が得意ではないので、うまく意思の疎通ができませんでした。もっと勉強しておけば良かったと、この時ほど悔んだことはありません。言葉が通じず、相手が困った顔をしているのを見るのが一番つらかったです。しかし、英語の苦手な私にも通じるように話しかけてくれる姿を見て、言葉の壁があっても積極的に会話をしたいと思う事が大切だという事を知りました。

言葉が少しずつ通じるようになると、今までの不安が取り除かれ、心に余裕ができ、ドイツの素敵なおとろやボッパルト市の魅力的なところを素直に感ずることができました。ボッパルト市以外にもいくつか他の町にも行きましたが、一番空気が澄んでいる町はボッパルト市でした。ボッパルト市は空気が澄んでいるだけではなく、緑が多く、見る物全てが魅力的で、青梅とは違った自然の恵みを感じ取ることができました。

私が今回の派遣で学んだ事は、会話を楽しむことです。たとえ言葉の壁があったとしても、片言の英語でも初めて言葉が通じた瞬間の喜びは、一生忘れられないものとなりました。そして、もう一つ学んだ事は挨拶の大切さです。滞在中にリフトに乗る機会がありました。ドイツ人は挨拶をしたら誰にでも挨拶を返すのかな？と私はふと思い、リフトですれ違った一組の老夫婦に挨拶を試みました。すると、温かい笑顔で挨拶を返してくれました。とても温かい笑顔でした。リフトを降りる頃には、沢山のひとと数えきれない程の挨拶をして、挨拶は気持ちのいいものだと思うようになっていました。このような事を学ぶことができ、この使節団に関わる日本とドイツのすべての方に感謝しています。良い経験をさせていただき、本当にありがとうございました。



ボッパルトに行って生まれたこれからの目標
青梅市立第二中学校 2年
徳永 陽奈

私は、これまで自分から積極的に何かをやろうという
勇気がなかなか出せませんでした。そんな私を変えたく
て今回ボッパルト派遣団員に応募しました。

しかし、それは難しいことでした。いざボッパルトに
行ってみると、パッと英語が出てこなくて、言葉の壁を
強く感じました。でも本当にあたたかく迎えてくれたホ
ストファミリーのみんなともっと話したい、もっといろ
いろなことを伝えたいと思い、勇気を出して、持ってき
た日本食を見せ、「一緒に作ろう！」と言えました。そ
してみんなで作り、おいしそうに食べてもらいました。
それは私にとって、とてもうれしくて勇気を出せるき
っかけになりました。それから、少しですが思ったこと
を何でも話しかけるように心がけました。それが伝わる
とすごく楽しくて、もっと話したいなと思いました。

この経験から、次はもっと自分の気持ちを伝えられる
ように英語を学びたいという目標ができました。そして、
またボッパルトに行って、今回伝えられなかったことを
お世話になったホストファミリーにたくさん伝えられ
るようにしたいです。

また今回、ドイツで建物などいろいろな物を見ること
ができました。家一つ一つがかわいくて、そんな家々が
並ぶ街並は物語の中に入ったかと思うほどきれいでした。
ドイツの街並は日本とは全く別物で、私にとってす
ごく新鮮で衝撃を受けました。そしてボッパルトの市長
が「ボッパルトはドイツで一番古い町かもしれない。」
と言っていました。それほど古い物を大切にしている町
なのだなと思いました。また、変わった物もたくさんあ
りました。取っ手がスーツケースみたいにのびて転がせ
るようになっている買い物かごや、開閉が簡単にできる
飲み口のついたペットボトルのキャップなどです。そん
な物を発見して、何気なく変わった物があると日常が少
し面白くなるなと思いました。

私はドイツに行ってきた実際にいろんな物を使ったり、
街並を見たりしてたくさん衝撃を受けました。いろ
いろな物に出会い、面白いと思ううちに私には夢がで
きました。それは、そういう「物」をデザインする職業、
工業デザイナーになるという夢です。前から思っ
てはいましたが、今回もっとそう思うようになりました。
そして、いろいろな人と話して、世界の人とコミュニケーション
をとることはとても楽しいということを知ることが
できたので、将来は世界にはばたく仕事がしたいと思
いました。だから日本にしかない考え方と世界の考え方
を取り入れた物を作る工業デザイナーになりたいです。

今回大変なこともたくさんありましたが、いろんな人
や物に出会い、私はたくさん大切なことを学び、私自身
大きな影響を受けました。そして、いろいろなことを考

えさせられる体験になりました。それはドイツに行かず、
日本で普通に過ごしていたら絶対に気付かなかったこ
とです。本当に私は今回行くことができて、貴重な経験
ができたことを誇りに思います。そしてこれをきっかけ
に、これからはもっと世界の人とふれあい、いろいろな
物を見て自分の中に取り込んでいきたいです。



ボッパルトを訪問して

青梅市立第三中学校 3年
加藤 綾乃

「ボッパルト」私はこの地で、中学校生活最後の夏休みをととても素敵な経験で締めくくることができました。

私は実際に行く前は、不安でいっぱいでした。楽しみな気持ちも、もちろんありましたが、言語の違い等、不安と緊張ばかりでした。でもボッパルトに着いた時、たくさんのホストファミリーの方々が笑顔で迎えて下さり、私の中で自然と期待が不安を上回り、これからの一週間が楽しみで仕方ありませんでした。

家についてご飯を食べた後、ホストファミリーのクセンニャが夜の散歩にボッパルト市街を少し案内してくれました。もう午後の9時だというのに、まだ明るくてびっくりしました。ボッパルトはのどかな雰囲気であふれており、心が解放されました。街並みもととても可愛らしくて、童話の世界に入り込んだ気分でした。クセンニャの知り合いの方や友達にもたくさん会い、少しお話をしたりして、とても楽しかったです。

そして、私の中で特に思い出に残ったのは、カントギムナジウムを訪問した時のことです。全体でテーマ学習や歌や踊りを発表した後、私は小学校6年生ぐらいの子たちの英語の授業に参加させていただきました。そこでは、日本の学校との違いをたくさん見つけました。まず違うのが座席です。日本のように列ではなく、「コ」の字に近い形の配置でした。座席も仲の良い人同士でした。他にも、まず先生と生徒の仲が良く、生徒全員がとても積極的に発言していました。日本のような真面目でかたい授業ではなく、明るく楽しい、どちらかというと自由な授業でした。でも、自由でも一人ひとりが、きちんと授業に参加していたのですすごいと思いました。今の日本では考えられないので、いつかこんな授業が当たり前になったらいいなと思いました。また、嬉しかったこともありました。趣味を聞かれた時に、私はバスケットボールと答えました。すると、ある男の子が、自分もバスケットが好きだと言って、すごく喜んでくれました。最後には、私に「一緒にバスケットがしたい」と言ってくれて本当に嬉しかったです。

また、私にはもう一つ嬉しかったことがあります。それはホームステイ先での食事の時のことです。最初の食事の時、私はドイツ語のあいさつを忘れてしまったので、日本語で「いただきます」、「ごちそう様でした」と手を合わせて言いました。すると次の日の朝食から最後の食事までお母さんが、一緒に食べる時でも、別のことをやっている時も、必ず毎回一緒に手をあわせてくれました。日本人の私としては本当に嬉しかったです。

私は言葉が通じないという不安がありましたが、やはり通じなくて、とても大変でした。日本語だったら簡単なことも、うまく伝えられなくて、語学の大切さを痛感

しました。でも、伝えようとする気持ちがあれば伝わるということと、伝わった時の喜びを感じることができました。今まで日本という狭い世界でしか生きてこなかった私にとって、伝えることの難しさ、伝わった時の喜びは初めて知りました。それはいつまでも忘れられません。



ボッパルトへの派遣を終えて

青梅市立西中学校 3年
猪野 遥香

私は今回の派遣で、ボッパルトの様々なものを見て、感じてきました。初めは長いと思っていた一週間も実際にはとても短く感じました。

12時間の長いフライトを終えてフランクフルト空港に着いた時、私にはまだ実感がなく、ようやくボッパルトへ来たという実感が湧いたのは、ホームステイ先のベッドへ寝転がったときでした。その日は、これから始まるボッパルトでの生活への期待と不安を抱きながら、朝までぐっすり眠りました。

次の日から始まったボッパルトでの生活は、私にとって驚きと感激の連続でした。どこを歩いても見えるヨーロッパ独特の街並みはまさに小さい頃に絵本で読んだ世界そのもので、更に2日目に乗ったリフトから見たボッパルトの街並みやその横を流れるライン川の様子はとても美しく印象的でした。

そして今回、私たちは、カントギムナジウムという学校へも行きました。事前に用意していた学習テーマの発表、そして歌とソーラン節を披露しました。たくさんの人を前に、とても緊張しましたが、みんな静かにしっかりと私達の発表を聞いてくれて嬉しかったです。全ての発表が終わった後には、英語の授業にも参加させてもらいました。日本とは違った明るい雰囲気の授業で、皆楽しみながら授業を受けている様子を見ていてとても微笑ましかったです。

また、日本とは違う、人差し指だけを立てる手の挙げ方も印象的でした。

その日の夜には、友好協会主催のパーティもありました。「僕たちの真似をしてやってみて！」と言われて即興で踊ったドイツの歌にのせたダンスがとても楽しかったです。その後にはボッパルトの方も含めた皆でソーラン節を踊りました。全く知らなくても一生懸命に真似て踊ってくれる姿が嬉しく、ボッパルトの人の温かさを感じました。

そして私は、今回ボッパルトを訪れるにあたり、「6年間やってきた英会話をどれだけ使えるかを試してみたい！」ということを密かに自分自身のテーマにしました。実際に行ってみると思っていた以上に言葉の壁は大きく、まだまだ未熟だということを思い知らされました。でもその中で、「一生懸命に伝えること」の大切さも学ぶことができました。必死に単語を並べたり、ジェスチャーを交えたりすると、向こうも理解しようとして真剣に聞いてくれました。それで会話が成り立った時の喜びは、言葉では表しきれないほどでした。

今回の派遣で、私はとても素晴らしい経験をする事ができました。消防ボートで下ったライン川や日本とは違った雰囲気の街並み、フリータイムの日に連れて行っ

てもらったケルンの大聖堂、ドイツの歴史を感じたマルクスブルグ城も、リフトから見たボッパルトの景色も、すべてが私にとって新鮮で輝いていました。そして何より、ホストファミリーやそのほかのボッパルトの方々の温かさを感じることができました。この経験を生かし、今まではなかなか行動に移せなかった国際交流にも、もっと積極的に関わっていきたいです。また、今回のことをなるべく多くの人に知ってもらい、青梅とボッパルトの友好の架け橋になっていけたらと思います。



未来につなげるために

青梅市立第六中学校 2年
松林 太輝

言葉は通じるかなあ…。一週間無事に過ごせるかなあ…。など、いろんな不安を抱えて青梅市の姉妹都市であるボッパルトに旅立ちました。でも不安だけではなく、初めての海外ということでわくわくもしていました。ホストファミリーの人たちはどんな人たちだろう。怖い人たちだったらいやだなあ…。でもそんなことはないだろうと、自分でいろんな想像をしていました。そして実際にベッカー家のみんなに会うと、とても優しくそうな人たちじゃないかと、とても安心しました。これからの一週間がとても輝いて見えました。

しかし、困ったことが続出しました。それは「言葉の壁」です。「言葉の壁」が僕の前に立ちました。相手と通じ合うには、この壁をどうにかして越えなければいけない。そう思った僕は、ジェスチャーという「はしご」で壁を越えようと思いました。ある程度は登れましたが、高さが足りません。とても悩みました。あともう少しで越えられそうな壁の向こう側にどうやってたどり着いたらいいのか。そこで僕は、自分なりの言葉でやれることをやりました。その結果、通じあうことができました。僕は相手と通じた時の快感が好きです。これからもいろんな人と話をしたいです。

僕はドイツで「いいなあ」とうらやましいと思うことに何度か遭遇しました。一つ目は朝ご飯です。なぜかというパンの上に載せる具材の種類が多く、ハムといった肉類、種類の多いチーズ類やジャムなど、その時の自分に合ったパンにカスタマイズできるからです。日本ではあまりできない体験です。二つ目は陸上部員として、カントギムナジウムのグラウンドの地面が陸上競技場のようなゴム状の地面だったことが、とてもうらやましかったです。三つ目に、学校の授業が終わる時間が早いことがとてもうらやましいです。ただ、学校にプールが無く、バスに乗って行くということを聞いて、ちょっと日本の学校にもいいところがあると思いました。そして最後はドイツ全体がうらやましかったです。街並み、人柄、食べ物、学校などドイツのすべてが好きです。将来はドイツに住みたいと本気で思いました。

今回の訪問では、たくさんの人と出会い、学び、笑い、泣きました。このこと事を未来につなげるために、これからもドイツに関わっていきたいです。そしてまた、いつかドイツに行って、**German life**を味わいたいです。その時まで勉強をがんばりたいです。今回は本当にボッパルトに行けてよかったです。今回の体験を未来につなげるために、心の中で大切にしておきたいです。青梅の方々やボッパルトの方々に全力で感謝します。ありがとうございました。



ボッパルト訪問を終えて

青梅市立第七中学校 3年
木寄 彩花

私は今回の「第14回青少年友好親善使節団」のボッパルト市訪問が初めての海外でした。飛行機に乗るのも初めてで、「英語もうまく話せないのにドイツの方と会話が出来るのか」「一週間もホームステイでやっていけるのか」など、色々な面で不安を感じていました。しかしボッパルト市に着き、ホームステイ先の家族に会った時、今までの不安は一気に吹き飛び、期待へと変わりました。ホームステイ先のお母さんは初めてのあいさつの時にハグをしてくれたのですが、私は初めての経験だったので驚いてしまい、戸惑いながらやりました。でもすごく嬉しかったです。ホームステイ先の家族の皆さんは私を心から歓迎してくださり、私専用の部屋を用意してくれました。初日からたくさんの驚きがありました。

ボッパルト市は自然に囲まれていて、大きなライン川も流れていてとても美しい町でした。見るものすべてがひとつの絵のような静かできれいな町並みでした。私はその町並みをひと目見た瞬間に、ボッパルト市が好きになりました。

一週間の中でたくさんのものを見て、体験しました。その中で特に印象に残っていることは、ボッパルト市と友好協会の方々が主催してくれた「友好の夕べ」です。「友好の夕べ」では、ホームステイ先の家族の方や友好協会の方々が集まって、私たちを歓迎してくれました。みんなで話して交流したり、食事をしたりしてとても楽しかったです。後半にはドイツのダンスを教えてもらいみんなで踊ったり、事前学習で練習してきたソーラン節と歌を発表したりしました。ドイツのダンスはとても楽しいもので、日本とドイツの壁をなくし、みんなで踊り、とても楽しかったです。ソーラン節は私たちも元気よく踊り、ドイツの方々も喜んでくださり、嬉しかったです。ソーラン節もドイツの方々と一緒に踊り、最後に歌をうたい、「友好の夕べ」が終わりました。すごく盛り上がり、多くの方々と交流を深めることができ、最高の思い出となりました。

ボッパルトでの生活は毎日がすごく楽しく、驚きの連続でした。初めは一週間なんて長いと思っていましたが、あっという間に過ぎてしまい、お別れの日には「もっとボッパルトにいたい」と思いました。最後にホームステイ先の家族のみなさんとハグをしました。今度は気がつくと、自分から自然にハグをしていました。お母さんが「またボッパルトに来た時は私たちの家においで」と言ってくれたので、うれしくて感動で胸がいっぱいでした。

今回ボッパルト市を訪れたことは私にとってとても貴重な経験となりました。考え方も以前とは違い、物事を広く考えられるようになったと思います。ボッパルトでの出来事は、私の一生の思い出です。そして今回出会

った人は一生の友人です。これで終わらずにこれから長く交流を続けていきたいと思いました。必ずいつかまたボッパルトを訪れ、今回お世話になった方々に会いたいです。そして今回、このメンバーで行けたことも私はとても良かったと思います。ボッパルトの方々、青梅市の方々、使節団の皆さんありがとうございました。



Danke＝ありがとう

青梅市立霞台中学校 3年
下田 幸奈

私は、青少年友好親善使節団として青梅市の姉妹都市であるドイツのポッパルト市へ行きました。ポッパルト市訪問は私にとって、とても貴重な体験でした。一週間ポッパルト市で生活してみて、私は人々の優しさと温かさを感じました。

私はステュム家にホームステイをさせていただきました。初めて対面したときは、「家庭に私一人で大丈夫なのか」という不安と緊張がありました。私はあまり英語が得意ではないので、言いたいことが伝わらないことが多々ありましたが、それでも相手は私のめちゃくちゃな英語を一生懸命に理解してくれようとしていました。伝わったときはとても嬉しく、忘れてはいけない感情だと思いました。私はホームステイをして積極的に自分の意見を言う大切さを学びました。私をステュム家の人たちは、とても温かく迎えてくれ、私を本当の娘のように接してくれました。そのおかげで私は不自由なく生活することができました。最後のお別れのときは一週間分の思い出、家族の優しさを思い出し涙があふれました。ステュム家には本当に感謝しかありません。将来、またポッパルト市へ行くことがあったら会いに行きたいと思います。

ポッパルト市訪問で私が特に思い出に残っているのは、3日目の「友好の夕べ」というパーティです。私達はここで事前学習から練習していた、よさこいソーランを踊りました。ドイツの人はすごく喜んでくれて、私達が踊り終わった後に一緒に踊りました。複雑な部分があり難しかったけど最後のところではみんなで盛り上がり、とても達成感がありました。私がこのパーティで何より楽しかったのはドイツの人が教えてくれた **Fliegerlied** という曲の歌とダンスです。簡単で楽しいダンスで、最初は日本人同士で踊っていましたが、徐々にみんなばらばらになり、国とか知り合いとか関係なしに一緒に踊りました。最後はみんなでハイタッチをし、会場が一体になれました。私がこのパーティで学んだことは、たとえ言葉が通じなくても笑顔や動きでコミュニケーションをとることができ、相手と仲良くなれるということです。このパーティを催してくれたポッパルト市、友好協会、ドイツの皆様に感謝です。

ポッパルト市訪問では言葉の壁や生活の違いで困ったこともありましたが、そのたびに誰かが助けてくれ、感謝の意味、そして助け合うことの大切さをあらためて学ぶことができました。そして、これらの学んだことは、これからの生活に生かしていきたいと思いました。私はこの体験を機に新しい夢ができました。高校ではしっかりと英語などの語学を勉強し、大学はドイツの大学に入学したいと思いました。そしてゆくゆくは通訳の仕事に就き、世界と日本の交流に役立ちたいと思いました。こ

のような体験をさせていただいた青梅市に感謝です。ありがとうございました。青梅市とポッパルト市の友好関係がより良くなるために、これからも姉妹都市交流に務めていきたいと思います。Danke.



「ボッパルトに行ってみて」

青梅市立吹上小学校 3年
高橋 靖幸

僕は、青梅市青少年友好親善使節団員として、姉妹都市のボッパルト市に行ってみて、今まで体験したことのないことばかりの一週間を過ごしました。

今回、初海外、初ホームステイですごく緊張しました。でも、その緊張感に負けないくらいに未知の土地に行くドキドキと、何が起こるか分からないワクワクでいっぱいでした。最初の研修のとき、知らない人ばかりで身構えていましたが、何回も研修を重ねていくごとにみんなとも仲良くなり、少しだけ緊張が和らぎました。

ボッパルトに着いてまず感じたのは、日本と違って湿気でじめじめしていないことです。フランクフルト空港からバスで移動し、ボッパルトに着いた時に事前研修で会ったことのあるニッキとティムが手を振っていてくれて、歓迎されていることにホッとしました。僕のホームステイ先の家族は、なぜか一目でわかりました。お父さんと話してみると、英語は通じにくかったけれど、なんだか話ができているような気がしました。

僕がボッパルト市内で感じたことは、静かで空気がきれいなことです。なんだか青梅にいるような気分になりました。それからカントギムナジウムに行って、授業に参加した時に印象に残ったことがあります。日本の授業風景は、手を積極的に上げる子とそうでない子に分かれますが、ドイツではその様な事は無くみんなが手を挙げていてとても楽しい雰囲気でした。

日曜日のフリータイムの日、ドイツの日曜日は多くのお店は休業で、朝ご飯は11時くらいから食べることにびっくりしました。この日はホームステイ先のオリバーとマークと一緒にプールに行きました。日本のサマーランドのように人がいっぱいでした。商店街では、お土産を売っている店とレストランが少しだけ開いていました。

今回ドイツに行ってみて、今までテレビなどでしか見たことのないような所に行き、日本とは違ったルールのもとで生活する体験は、なかなかできることではなく、海外に行くことは良いことだと思いました。そして、「言葉の壁」という言葉を耳にしますが、あまりしゃべれなくとも相手に伝えようとする気持ちがあれば「心で通じる」ということも学びました。

みなさんのおかげで今回無事にボッパルトに行くことができました。ありがとうございます。そして、これで終わりにせず、これからも青梅とボッパルトの姉妹都市交流に協力し、さらなる発展に貢献できるようにしていきたいです。



僕の家では、僕が幼い頃からボッパルトからの使節団の受け入れをしていました。僕の姉がボッパルトへ使節団として行っていた事もあり、僕は以前から「中学生になったら使節団の応募をしてボッパルトに行こう」と考えていました。受け入れた方々の話を少しずつ聞いていたりもしたので、ボッパルトとはどのような所なのか想像もしていました。ですが実際に行くと、人から聞いたものと自分の目で見たものはやっぱり違うんだなあ、と実感させられました。

僕が宿泊させていただいたのは、去年ボッパルトからの使節団として受け入れをしたダニエルの家でした。

その時はあまり話ができなかったこともあり、シャイな男の子なのかと思っていましたが、生活を共にしていると、細かいことを気にかけてくれ、家の人と話していると分からないことがあったりすると、分かりやすく説明してくれたり、とてもお世話になりました。

ボッパルトの人たち、ドイツの人たちはとても丁寧にやさしく接してくれ、その面では青梅の人たちとも似た印象を受けましたが、違いがあると思ったのは、積極性です。日本で僕の友達に外国の人を紹介したときには積極的に話しかけることができる人は少なかったのですが、ボッパルトでは、皆さんに積極的にコミュニケーションを取っていただき、僕が今回の目標としていた「自分から」と言うのが達成できるかどうか、と思うほどでした。

この派遣で一番心に残ったのは、やはりボッパルト市と友好協会が開催してくれたパーティでした。僕はそこで以前受け入れをしたユルゲンさんに会うことができました。小さい頃のことだったのであまりはっきりと覚えてはいなかったのですが、別れた人ともう一度会えることは、とてもうれしく思いました。そこから、またこのボッパルトに来て、みんなと会いたいと思いました。

パーティでは、ボッパルトの人たちにお祭りの時に踊ったと言う踊りを見せてもらったり、ソーラン節を踊って見せたり、それぞれ入り混じってみんなで踊ったりして、とても盛り上がりました。その後は日本の歌を歌いました。僕はそこで歌に合わせてトランペットを吹いたのですが、そのときの演奏をドイツの人たちがずっと褒めてくださってとてもうれしかったです。

今回の派遣で一番感じたのは、「自分でやってみないと何も本当にはわからない」ということでした。これは、これから自分がどう行動し、どう生きていくかと言うことを考え直し、決定していく良いきっかけになったと思います。

これからもこの経験を胸に、「自分から積極的」にがんばって行こうと思います。



Danke!!!

青梅市立泉中学校 3年
野崎 麗

中学校生活最後の夏、私は思い出に残るとても貴重な経験をさせていただきました。

受験という大きな壁を前に、受験勉強以上に素晴らしい経験ができるだろうという思いと、中学校最後の夏にキラキラした思い出を作りたいと思い、この使節団に応募しました。

最初は、他の学校の子達と仲良くなれるだろうか、ホームステイという初めての経験で言葉が通じなかったらどうしよう、など、様々な不安がたくさんありました。でも、事前研修を重ねていくうちに、使節団のメンバーともどんどん仲良くなることができ、ドイツ語も少しだけ勉強し、不安がだんだんと薄れてきて、出発の前日には準備をしながら、とてもワクワクする気持ちでいっぱいでした。

12時間のフライトを経て、フランクフルト空港に着き、いよいよドイツ・ボッパルトでの1週間の生活が始まりました。私の民泊家庭のベアーテさんは、空港に迎えに来て、私のことを探していて、英語で「麗は誰？」と聞かれたので、「私です」と答え、ぱっと表情が変わり満面の笑顔で自己紹介をしてくれました。私も頑張っって覚えたドイツ語で、なんとか自己紹介をすると、とても喜んでくれ、ボッパルトでの生活がさらに楽しみになりました。

ボッパルトでの生活は、本当に楽しく、一日一日が終わるのがとても寂しいほどでした。そして特に私の心に強く残っていることが、3つあります。

1つ目は、カントギムナジウムへの訪問です。まず、学校に1歩足を踏み入れたとき、日本の学校と校舎の様子が全然違って、廊下や階段のあちこちに絵が飾られていたり、天井がすごく高かったりなど、私が通っている学校とは、違うことだらけでとても驚きました。私は、6年生の英語の授業を体験させてもらいましたが、どの子も先生が質問を投げかけると、とても積極的に手を挙げ、先生に当てられると笑顔で嬉しそうに自分の意見を発表していました。ワークを解く時間は1人1人が集中していて、分からないところがあると友達同士で相談し解決をしていました。この授業の様子は、私の学校ではあまり見られないことなので、見習わなくてはならないなと思いました。それから、私がこの訪問でもう1つ思ったのは、日本から離れたドイツという地で同じくらいの年齢の子が、私たちと同じように学校で友達や先生と関わり、勉強や自分の好きなことなどに打ち込んでいるのだ、ということです。当たり前のことのように思いますが、実際に自分の目で体験すると、とても不思議な気持ちになるのと同時に世界に対しての視野が一気に広がった気がしました。

2つ目は、ボッパルト市と友好協会が開催してくれた「友好の夕べ」です。このパーティには、本当にたくさんの方のドイツの方が来て、私が座ったテーブルもほとんど皆ドイツの人でした。話をする時、日本語はもちろん使えないので、英語で頑張っって話すと、いろんな話ができ、本当に楽しく、通じた時はとても嬉しかったです。それと同時に、もっと英語を勉強しなくてはいけないな、と思いました。英語がもっと使えれば、たくさん話ができ、ドイツ語は英語と似ているところがあり、英語が話せればドイツ語もすぐ話せるようになるらしいので、もっともっと勉強しよう、という気持ちにもなりました。そのあとのソーラン節とドイツのダンスを踊った時は、私達とボッパルトの人達が本当に心から交流できた感じがしました。

そして3つ目は、ボッパルトの人々の温かさや笑顔です。最初不安だった民泊家庭での生活は、言葉が通じない時、一緒に考えてくれたり、ドイツのいろいろな料理を食べさせてくれたり、疲れていたら気遣ってくれたり、本当にたくさんの思い出と優しさをもらい感謝してもしきれないほどです。また、ホストファミリーの方だけでなく、いろいろなところに観光をする時、付き添ってくれた方々や、いろいろな話をしたボッパルトの人達、どの人も優しく笑顔が素敵でした。

今回のボッパルトでの経験は、私の心にキラキラした思い出として、とても深く残りました。私が生きてきた中で1番充実した夏になり、とてもたくさんの大切な経験をすることができました。感謝してもしきれないような気持ちをいつか直接伝えに行くために、もっとたくさんの方のことを勉強して、もう1度絶対にボッパルトに行きたいと思います。そして青梅とボッパルトの絆がいつまでも続くように、これからもいろいろな活動を頑張っっていきたいです。



今回、青梅青少年友好親善使節団としてのドイツ・ボッパルトの訪問は私にとって、初めての海外でした。そして2年越しの夢でもありました。

前日の夜は緊張してなかなか眠ることができませんでした。ドイツに到着し、ボッパルトに着いたらさらに緊張しました。ここからは団員のみんなとは離れ離れ。一人ぼっちです。民泊家庭の方に迎えられ、車に乗りました。車内でもとても緊張していました。何か話しかけられてもなかなか上手く応えられず、あいづちも上手く打てず、笑顔で応えることしかできませんでした。それでも民泊家庭の方は私に温かく接してくださいました。いつも気遣ってくださり、「よく眠れた？」や帰ってくると「何か飲む？」など、様々なことを毎日聞いてくれました。また、私の部屋にラジオや飲み物まで用意しておいてくれました。特に民泊家庭にいた同い年で同じ学年の女子、レアちゃんとは夜にお互いの好きな音楽を聴きながらおしゃべりしたり、アイスを食べたり、レストランやスーパーに連れて行ってくれたり、ロックパーティーに連れて行ってくれたりしました。彼女は私に現地の同い年の子がする遊びを体験させてくれました。とても新鮮で楽しかったです。そうしているうちに英語であいづちも打てるようになり、少しだけれど英語で話せるようになりました。悲しいこともありました。日曜日の朝、レアちゃんが泣きながら私の部屋に入ってきたので、「どうしたの？」と聞くと「私のおじいちゃんが死んだの」と言っていました。だからその日はレアちゃんの友達と過ごしました。その夜、レアちゃんは遠出した私を気遣い「疲れたでしょ？大丈夫？」と聞いてくれました。こんな辛いことがあったのに私を気遣い笑顔でいてくれたレアちゃんを私は、なんてやさしい人なのだろうと思いました。

ドイツの町並みは、ため息が出るほど綺麗でした。また自国の文化を大切にしていました。コブレンツのような大きな街でも新しい建物はあるけれど、昔の街並みが残っていました。古い物を大切にしながら新しいものを受け入れるドイツの文化に感動しました。そして、資源を大切にするとところにも感動しました。部屋の電気は出て行く時は必ず消し、朝は電気をつけず太陽の明かりで過ごしました。日本だと、どこかの建物に入ればクーラーが利いているけれど、ドイツは違いました。かけていても微風でした。ドイツがユーロ圏で唯一生き残っている理由がこういうところにもあるのかなと思いました。

ドイツの方との交流は今も心に残っています。意思疎通が出来た時はとてもうれしかったです。最後の日には気持ちが溢れて泣きながらお別れしました。沢山思い出

があり、書き切れません。これからもドイツの方と交流を続けたいと思います。

団員のみんな、楽しい思い出をありがとう。そして皆さん、今回は素敵な体験をありがとうございました。



私は、ボッパルトに行く前から精神的、文化的にヨーロッパに憧れを抱いていました。文学を開く度に、さも当たり前かのように描写されている風景に心を躍らせて、いつか、その世界に飛び込んでいくことが私の夢の一つでした。何より私は私の見たことのない世界を見たかったのです。狭い自分の価値観を広げたいと思っていました。

ボッパルトには私の描いた想像以上のものが待ち受けていました。壮大であるが、町にひっそり佇んでいる教会はキリスト教の精神や文化を感じさせ、あちらこちらに残っている城跡は、この土地の歴史を物語っていました。そして、日本のようなネオンの光や看板の煩わしさも無く、洗練されていたボッパルトの街は私を虜にし、その目の前に広がる世界に心酔してしまいました。その時に感じた嬉しさや興奮は、いまでも強く残っています。新しいものを増産するのではなく、残っている文化を継承して生きていく、それがドイツの生活で、日本との違いなのだと感じました。そんな精神性の違いが町並みに表れたのではないかと強く思います。また、そんな街で過ごしていると、常に文化に触れあっている生活はとても豊かで、「殺伐とした」世界とはかけ離れていました。ボッパルトに住んでいる方達もとても豊かで、親切な人達ばかりでした。特にホストファミリーのツォイツハイム家の人達は、最初は臆病で英語が十分でなかった私を受け入れてくれるだろうかと思い、不安でいっぱいでしたが、ツォイツハイム家の方々は寛大にフィーリングや身振り手振りで分かりやすく接してくださりました。言語は違えども感覚的に通じあえること、人種をこえて人間というくくりでのコミュニケーションをとることがいかに感動的かということを実感しました。今まで、日本の家でボッパルトの人達のホストファミリーの立場として感じたこととは違い、自分がひとつの家族の一員として受け入れてもらえたということは、これまでにない最高の喜びでした。

ボッパルトでの生活は、何気ないことが、すごく勉強になりましたし、すごく影響を与えられました。小さなこと一つ一つが純粋な感動で、驚きで、これほど心を動かされたのは、今までにないほどでした。この青少年の時期にボッパルトにいったという体験は、私の価値観に影響を与えるもので、この派遣でしか得られない物を得てボッパルトの方たちと交流をしてきて本当に良かったと感じました。今回、この派遣をすばらしいものにできたのは、一緒にボッパルトへ行った使節団のメンバーと共にあったからだとも思っています。最初は全くの初対面からはじまった使節団でしたが、ひとりひとりが個性的かつ快活で、この団を盛り上げてくれました。この

青少年使節団のリーダーになって、なにより一員になって、本当に私は幸せでした。ありがとうございました。



ボッパルト訪問を終えて

都立青梅総合高等学校 1年
齋藤 春花

私が泊まったナス家の方々は、みんな笑顔で私を受け入れてくれました。

私が何か言おうとすると、いつも一生懸命になって聞いてくれて食事の後片づけなどもさせてくれ、お客さんとしてではなく、本当の家族のように接して頂きました。

ホストファミリーのミリアムちゃんは、私と同年の15歳ということもあってとても親しくなり、YouTubeでお互いの好きな音楽を聴きあったり、一緒に犬と遊んだり、私の泊まった部屋に虫が出た時には虫を退治してくれたり、私がサッカーの練習に参加した時には、親友のリアちゃんと一緒にずっと見ていてくれました。

特に思い出に残っていることは、私はホストファミリーに日本からのお土産として駄菓子やカレーうどん、手ぬぐいなどをプレゼントしたのですが、どれもドイツには無いものなのですごく喜んでくれました。お母さんのベレーナさんは、「かっぱえびせん」をととても気に入ってくれて、一人で全部食べてしまいました。また、手ぬぐいはタオルとして使ってくれて、テーブルの上に置く飾りにしてくれました。日本に帰国してから、メールで「うどん作ったよ！美味しかった！」と言ってくれてすごく嬉しかったです。

行動日程の中では、たくさんの古城や要塞、また、古くからの街並みなどをいたるところで目にしました。現地の人に「なぜこんなにたくさんの古い建物や街並みが残っているのですか？」と聞くと、ドイツの人々は昔のものを残しながら新しいものを取り入れていこうという文化を持っていて、古いものを修復して長くのこしていこうという思いがあるそうです。私はそれを聞いて、日本は新しいものがたくさんあるけれど、古いものは次々と無くなっていて、日本人も学ぶべき文化なのではないかと思いました。

また、3日目の夜に行われたパーティがとても印象に残っています。

そのパーティでは、みんなでドイツのダンスを踊ったのですが、本当に楽しくていろんな方と打ち解けることができたので、とてもいい思い出になりました。ボッパルトでの8日間はあまりにも楽しすぎて、あっという間に過ぎていきました。

別れの時は本当に悲しくて今までで一番とっていいほど泣いてしまいました。そして、また絶対に戻ってくると心に誓いました。

私はこの8日間で、人に自分の気持ちを伝えることの大切さ、住む国や言語がたとえ違っても、お互いを理解しあう気持ちの素晴らしさを身をもって感じました。

また、今回のボッパルト訪問で、自分を成長させる必要があると思いました。伝えたいことがたくさんあった

のにうまく言葉にできずに自分の力不足を思い知りました。この悔しさをばねにして、将来は留学をして英語やドイツ語の勉強に励みたいです。



ボッパルト訪問を終えて

引率

青梅市立新町中学校 教諭

鈴木 奈津子

このたび、青梅市友好親善使節団の引率教員として、ボッパルト市への派遣の機会をいただき、本当にありがとうございます。

ボッパルトの皆様は本当に親切で友好的な方ばかりで、駐車場での出会いのときから、まるで家族のように出迎えてくれました。言葉が通じなくても「歓迎したい」という思いが伝わり、このことが生徒たちに安心感を与えたのでしょう。生徒たちは、出発式では不安と緊張の入り混じった表情でしたが、ボッパルトが近づくにつれ、その表情が少しずつ期待に変わっていきました。そして、ステイ先のご家族と対面したときのキラキラとした笑顔は、今でも忘れられません。

滞在中には、観光地への案内もたくさんしていただきました。昼食時や移動時には、折り紙をつかって会話を広げていたり、アニメやゲームの話題で盛り上がったりと、生徒それぞれが、これまで学んできた英語やドイツ語を駆使して交流している姿が微笑ましく、また、たくましくも感じられました。たった8日間でしたが、どの生徒も怖気づかずに挑戦し、意欲的に交流しており、日に日に成長していく様子がみられました。それぞれの家庭での出来事や、たった一言を伝えるために苦労したこと、言いたいことが通じたときの感動を報告してくれ、「もっと語学を学びたい」「諦めない心が大事」「ボッパルトの人たちが日本に来るときは、こちらの人たちがしてくれたように、たくさん日本を案内してあげたい」など、感じたことや学んだことを日々語ってくれました。これからの生徒たちの、更なる成長が本当に楽しみです。

私自身も、この訪問でたくさんを感じ、学ばせていただきました。カントギムナジウムの訪問では、小学校6年生に相当する学年の英語の授業を拝見しました。ギムナジウムの生徒たちは活発に発言し、その発言を真剣に聞く態度もしっかりと身についていました。また、団員たちが英語でいくつか質問すると、クラスにいたほぼ全員が挙手して我先にと発言し、団員たちもとても刺激を受けたようでした。

また、訪問中は平日、休日を問わず、街全体にとってもゆったりとした時間の流れを感じました。家族で過ごす時間や自分のための時間を大切にしているようで、日本のように大人も子どもも何かに追われているような生活とはまったく違う生活をしているように感じました。ライン川を中心に、古くから残る自然や街並みを大切にしているということも、街のあちらこちらに感じました。

今回の経験は、団員一人一人にとって大変貴重なものとなり、また彼らの人生において、多大な影響を与えたことと思います。その中で、外国に対する関心や、語学

学習に対する意欲が増したのなら、英語科教員として嬉しい限りです。また、そのような子どもたちとこの8日間を過ごせたことを、本当に誇りに思っています。

最後に、このたびの青少年友好親善使節団派遣に際し、ご尽力いただいた諸関係の皆様には感謝申し上げ、ご報告とさせていただきます。本当にありがとうございました。



昭和45年、当時小学校2年生だった私の描いた絵が、市内小中学校の児童生徒の絵画の交換ということでポッパルト市へ贈られました。私が、人生で初めて「外国」を意識した町こそ、当時、西ドイツであったポッパルト市でした。

以来40年間、常に私の心の中にあり、いつか訪れたいと憧れていたその町は、美しい風景だけでなく、そこに住む人の心からのおもてなしをもって、私をやさしく迎えてくれました。また、今回、もしかしたら私の絵に会えるかもしれないという淡い期待を抱いての訪独でした。

13名の中高生で構成された使節団。私は、初めて会ったときから、敢えて皆のことを「チーム」と呼びました。それは、一人ひとりが、サッカーや野球のチームのように、ピッチャーやキャッチャー、また1番打者や4番打者などといった、それぞれの役割を果たしてもらいたいと思ったからです。

団員は、またたく間に、明るい、元気いっぱいのチームになりました。一人でもメンバーが違えば、このチームは成り立たなかったでしょう。このような素晴らしい、笑顔が素敵なメンバーでポッパルトへ行けたことに、本当に心から感謝しています。

ドイツでは、全員がホームステイを経験しました。初めての海外旅行だった人もいた中、周りに日本語をしゃべる人がいない環境に置かれることは、不安で一杯であったと思います。また、カルチャーショックも多かったことと思います。団員の身振り手振りで汗をかきながら、なんとかコミュニケーションをとろうと努力する姿を見て、私は頼もしさを感じるとともに、心の中で「がんばれ」と声援を送っていました。言葉が通じたときの喜びを、いつまでも忘れないでいてほしいと思います。

訪問中、ポッパルト市および友好協会が開催していたパーティがあり、ベアシュ市長をはじめ、前ポッパルト市長やマラソン関係者など、両市の友好に関わった多くの方々が集いました。日本で練習を積んだよさこいソーランをドイツの若者と踊ったり、日本の歌を披露したりして交流を深めました。また、予定になかったラジオ体操の曲が流れたときには、団員のみならずポッパルトに住む日本人や、パーティに駆けつけてくれた在フランクフルト副領事も一緒になってラジオ体操をするといったハプニングも忘れられません。（ドイツ人は、これは何かの踊りで、なぜ日本人が、皆、一斉にできるのか不思議に思ったようです。）

また、ライン川のほとりで歌った「ローレライ」。歌の舞台となった場所のすぐ近くで、ドイツ人と一緒にこ

の歌を歌っていることに感慨深いものがありました。そして、異国の地で、「青梅締め」をもってパーティを閉じたことも姉妹都市ならではの出来事です。

私のポッパルト訪問はあわただしく、また充実のうちに過ぎていきました。結局、私の絵との再会はできませんでしたが、かつて、私の絵が訪れたまちを歩くことができたことは、何とも言えない嬉しさと、初めて訪れる街なのに、なぜか懐かしい思いも感じました。

この、2012年の夏の素晴らしい思い出を細部に至るまで忘れたくないと思い、多くの写真を撮りました。今、これらの写真を見ると、記憶の断片をつなげるピースとなり、その時に交わした会話や匂いまで、ありありと甦ってきます。

13人の団員は、大きく成長して帰国しました。また、今回の体験が人生のターニングポイントになった人もいます。ポッパルトへの派遣は終わってしまいましたが、本当の意味での国際交流はスタートラインに立ったばかりです。今後、両市の交流を担うリーダーとして活躍して、これからの友好親善が一層深まることを期待します。

末筆になりますが、今回の派遣に当たり、多くの方々にご協力いただき、感謝と感動をもってポッパルトを訪問できたことに、この場をお借りして心からお礼申し上げます。ありがとうございました。



(2) テーマ学習

「青梅とボッパルトのごみ分別の違い」

今回の青少年派遣事業では、青梅市とボッパルト市のごみ分別について学習をしました。

派遣の前に実施した事前研修では、青梅市のごみ分別について、清掃リサイクル課に研修をしていただきました。そして、ボッパルト市で民泊家庭の家族と生活をしながら、ボッパルト市でのごみ分別について尋ね、実際にごみ分別をして、青梅市とボッパルト市のごみ分別の違いについて学びました。

私がボッパルト市滞在中に、ライン川沿いを歩いていると、何メートルかに一つずつ、ポストに似たような物がありました。現地の方に訪ねてみると、犬のフン入れだと教えてくれました。そう言われてみれば、日本に比べて、犬のふんやたばこの吸い殻、小さなゴミなどは落ちていませんでした。このようなことから、ごみのポイ捨てなどに気を使っているのが分かりました。

ボッパルト市では、スーパーに空のペットボトルを持っていくと、お金に代えてくれます。青梅市では、ペットボトルの回収協力をしているスーパーなどで回収をしてもらえますが、お金をもらえることはありません。

また、ボッパルトではビニール袋を無料でもらえるところはなく、エコバックを使っている家庭が多かったです。スーパーの商品も日本のようにフルーツを二、三個ビニール袋に入れて陳列するのではなく、そのままを会計に持って行き、再利用しやすい紙の袋に入れて渡すようにしており、ビニール袋を使っているところはあまりありませんでした。こうしたことにスーパーでも資源を削減しようとする姿勢が見られました。日本ではエコバックを使う人も増えていますが、ビニール袋が有料化されているところはまだ少ないです。ビニール袋は日本もドイツを見習い、有料にしたほうがいいと思います。

私は今回の派遣で、ボッパルト市の道にごみが落ちていないことに驚き、空きびんやペットボトルを持っていけばお金に換えてもらえるということにも驚き、多くのことに驚くことばかりでした。

青梅市での資源の回収に対して、私は実際に分別することに気を使っているかと言われたら、そこまで気にしていませんでした。そこで、改めて青梅市のごみ分別について調べてみました。私は、ごみ分別について知っているつもりでしたが、意外と知らないことが多く、ごみの分別はとても細かに種類分けされていることに驚きました。そして、ビニール袋をあまり使わないことを日本がもっと徹底し、私もボッパルト市の資源を削減するという事を見習い、青梅のごみの削減に協力したいと思います。



ドイツでは、身近な所で環境に対しての工夫がありました。

一つ目はペットボトルのことです。ドイツでは、ペットボトルは他の缶や瓶と違って少し高い値段になっていて、ペットボトルを持って行くと他より高くなっている分のお金が返ってくるという仕組みがありました。そうすれば、みんなきちんと持ってきてリサイクルもできます。これは、どうしたらリサイクルできるかということのをいろいろ考えてあるいい政策だなと思いました。

二つ目はごみ箱です。私はホストファミリーにごみ箱を見せてもらいました。そうしたら、キッチンはもちろん子供のパウラさんの部屋のごみ箱まで分別できるようになっていました。日本では、部屋のごみ箱まで分別できるようになっていません。だから、普通の部屋のごみ箱までできるようになっているということは、生活の中で分別が当たり前のようにできていて、「分別しよう」という意識が高いなと思いました。

また、日本では燃えるごみは一種類だけですが、ドイツでは3種類に燃えるごみが分かれています。生ごみとペーパー、その他のごみです。生ごみは肥料にし、紙はまた新しい紙にするそうです。分けておけば、リサイクルするときに燃やすごみから生ごみや紙を取り出したりする手間が省け、そのままリサイクルできます。

ドイツは環境のために、分別やリサイクルがすごく当たり前にできていました。それはとても大切なことだと思いました。もしみんながそれぞれ分別などを当たり前にできたら、もっともっと世界の環境がよくなっていくと思います。



私はボッパルトへ行き、ごみについて考え、いくつか青梅とは根本的に違う部分があると思いました。

まず一つ目は、街の雰囲気です。青梅ではごみのポイ捨てを見かけることは少なくありません。でもボッパルトは全くと言っていいほど、道に捨ててあるということはありませんでした。私はきっと、街全体がポイ捨てをしてはいけない、できないといった雰囲気をつくっているからだと考えました。また、これは一人ひとりが環境について考えている証拠ではないかと思いました。

二つ目は、ごみになる物です。まず青梅には買い物袋があります。でも、ボッパルトにはありません。最近が変わりつつありますが、きっと日本では買い物袋があって当たり前という考え方が根付いている人が多いと思います。だんだんと環境への配慮がなされて、買い物袋をもらわなかったら値引きや、袋を買うという工夫がされています。ですが、それに比べてボッパルトでは、自分でバックやカゴを持っていき、そこへ入れるというのが当たり前です。どうしても必要な場合は、袋ではなく、量に応じた大きさのバックやカゴなどを買います。これらは繰り返し使えてごみにならないので、とても良いと思いました。

また、ごみの捨て方にも違いがあります。青梅は、燃やすごみ、燃やさないごみ、容器包装プラスチックごみは指定のごみ袋を買ってそれに入れて出します。ボッパルトでは、基本的に紙ごみ、生ごみ、プラスチックごみ、その他に分かれていて、それを袋ではなく家の前のバケツに入れます。また、そのバケツも色分けされていて分かりやすくなっています。青梅の指定の袋を買って、ごみを出すというのは、「中が見える」、「一家庭あたりのごみの量が減る」という点では良いと思います。でも袋を生産するのにお金がかかるうえに、最終的にはごみになるという根本的に良くない部分もあります。そのような部分を考えると、私はボッパルトの繰り返し使えるバケツのほうが良いと考えました。

一人一人が環境への意識が高いからなのか、私は全体として青梅よりもボッパルトの取り組みのほうがよいと考えました。でも、もちろん青梅にもいいところがあります。だから両者の良いところをもっと活かすべきだと考えます。そのためにも、お互い良いところ、悪いところを話し合い改善していけたらいいのではないかと思います。そして両都市が環境にやさしい街であってほしいと思います。

私は今回の旅で、ドイツのごみの分別の仕方について学びました。そして、日本との違いがたくさんあり、驚きました。それと同時に、ドイツのごみ分別から感心したことや考えさせられることもありました。

まず、ごみには燃えるごみ、燃えないごみ、プラスチック、ペットボトルなど、様々な種類がありますが、私がホームステイさせていただいた家には、それぞれのごみに対し、きちんと一つずつごみ箱がありました。更にごみ出しの時には、青梅では専用のごみ袋に入れて家の前や決められた場所に出しておきますが、ボッパルトでは、そのごみ箱ごと家の前を出し、中身だけをごみ収集車が回収していました。袋を使わないので、環境にも良いと思いました。

そして、日本ではごみ処理費は税金と、収集する袋の代金に含まれているそうですが、ドイツはそうではなく、もともと商品の代金に処分費が含まれているそうです。日本とは違った発想に感心しました。

そんな中、私はもう1つ驚いたことがあります。それは、スーパーマーケットなどへ行っても、ビニール製の袋がないことです。最近では日本でも環境のことを考え、ビニール袋を減らすための「エコバック」運動が盛んになっていますが、まだあまり定着していないと思います。でも、それがドイツでは「当たり前」になっていることがすごいと思いました。更にドイツには、お金に換えられるペットボトルもあるそうです。そして、スーパーなどへ行くと、ビンやペットボトルを自動で回収する機械もあると聞いて、日本ではあまりないものなので驚きました。

今回、ドイツのごみ分別を知ることは、日本と違う点が多いこともあり、環境について今まで以上に考えさせられる良い機会になりました。買い物へ行った時も、普通にビニール袋をもらうこともまだありました。ですが、ドイツでは必要最低限しかビニール袋を使わない姿勢に感心しました。日本では、ごみ収集袋を使う利点として、きちんと分別されているかを確認できること、を挙げています。逆にドイツでは、ごみ袋を使わないことで袋自体がごみにならず、ごみ箱も何度も使えるという利点を挙げています。ごみ袋を使わないことにより、きちんと分別がなくなってもわかりにくいですが、やはりそこは信頼関係で成り立っている部分もあるのかな、と思いました。また、ボッパルトを歩いていても、日本のようにごみが落ちていることはほとんどありませんでした。そういったことも含め、今までは少し疎かになっていたごみの分別やポイ捨て、ごみを減らすことなどについても、もっと色々な視点から考えていきたいと思いました。

まず、ドイツはごみ以前に環境への考え方が素晴らしいと思いました。どういふところが素晴らしいと思ったのかというと、一つ目に洗濯は一週間に一度など、とても水を大切にしているところです。聞いた話によると、水とビールの値段が同じだということです。日本では、毎日洗濯をしている家庭がほとんどで、蛇口をひねれば飲める水が安く出てきます。レストランなどでなら無料で飲むことも可能です。そういった点がドイツとは違います。

二つ目に発電です。よく見ると風力発電のための風車がいふいふところにあつた。日本でも問題の原子力発電所はすべて活動を停止する方向で計画が進んでいます。

ごみに対しても、考え方の違いが日本とドイツにはあると思います。例えば、ごみを出す時、青梅ではビニール袋に入れますが、ドイツではバケツです。青梅での考えは、中身が見えてきちんと分別してあるかを見るため、ドイツの考えは何回も使えるからだそうです。ドイツはごみの出し方までエコだと思いました。

他にも衣類やタンスは出来るだけ捨てるのではなく、人に譲るなどして再利用することをドイツでは決めているそうです。

こうして見ていくと、ドイツと青梅の考え方の違いが見えてきました。青梅では、分別をきちんとするということを前提にごみを処理していると思います。しかしドイツは再利用できるものは再利用するという考えです。しかもドイツでは月に一回しかごみの収集がないそうです。なぜそんなにごみが出ないのかを考えると、買い物でドイツのスーパーに行った時のことを思い出しました。ドイツのスーパーではレジ袋がありません。袋はありますが有料です。そういう点を一つ一つ合わせていくとあることが分かりました。ドイツは世界一の「エコ大国」です。



今回、ボッパルトを訪れて、すごく環境に気を配っていて、ほとんどの人がごみを意識していると思いました。一週間の中で、ボッパルトのごみについて少し知ることが出来ました。そしてごみについて多くの工夫がされていることを発見できました。

分別に関しては、燃えるごみ、燃やせないごみ、生ごみ、その他のごみとしっかり分別されていて集める日も決まっています。ごみの分別は日本よりもっとしっかりしていました。

ボッパルト市は青梅市と違いポイ捨てのごみがほとんどなく、ライン川もきれいでした。

ボッパルトのライン川沿いを散歩した時、たくさんのごみ箱を目にしました。ごみ箱にも種類があり、分別するようになっていました。日本にはこんなにごみ箱が設置されていないので、それを見て「だからみんながポイ捨てをすることなく、ごみ箱へ捨てられるのだろう」と思いました。他にも日本と違うことはたくさんあり、中でもスーパーマーケットのレジ袋がないことに驚きました。それはとても環境に良いことだと私は思います。日本でもエコバックの利用者が増えてきましたが、スーパーマーケットでは、まだレジ袋をもらえる状況なのでそれを利用している人もいます。そのため日本でのエコバックの利用は100%ではありません。ドイツのようにエコバックの利用者が増えれば良いと思います。

ボッパルト滞在中に私が一番驚き、すごいと思ったことは、ペットボトルのリサイクルについてです。ドイツでは水道水を飲まないため、ペットボトルの水を飲みます。空いたペットボトルをためて、スーパーマーケットでリサイクルをしていました。スーパーマーケットにはペットボトルを入れると、少しですがお金が返ってくるという機械がありました。私はその機械を見たときに「これはすごい。これなら気軽にリサイクルが出来るし、お金も返ってくるので多くの人が使えて、環境にも優しい」と思いました。とても工夫がされていました。

今回の滞在でごみについて注目をしていると、ボッパルトがきれいな理由が分かりました。そしてボッパルトに行つて、日本の場合便利すぎるのでごみが多くなるのだと感じました。

私自身もこれからはごみの分別をしっかりするなど、心をかけ、もっときれいな青梅市になってほしいと思います。



私はボッパルト市に着き、最初に感じたことは道にごみが落ちてないので、清潔だということです。青梅市では道を歩けば、いたるところにお菓子の袋、ペットボトルや缶が落ちています。それらは、そこに住む人の意識の違いだと思います。

まず家庭のごみの出し方は、主に紙や生ごみ等のリサイクルできない物を青・緑・黒色のBOXに、プラスチックを黄色い袋にそれぞれ分けて分別します。それらは家から車で少し走ったところにある倉庫のような大きな箱に各家庭から集められます。紙はプレスされ再生紙に、プラスチックは服や新しいプラスチックにリサイクルされます。生ごみは、私がホームステイさせていただいたステュム家では、庭で育てていた果物の肥料として再利用されていました。そのほかにも鉄はBOXに集め、専門の回収車によって回収されます。ペットボトルやガラスは色ごとに分けられ、リサイクルされ再利用されます。ボッパルト市では、ごみは廃棄物として処理されずに新しい物にリサイクルされます。

その前にドイツでは、買い物の際にごみを出さない工夫がされていました。私がスーパーで買い物をした時もレジ袋がなくて驚きました。肉や果物にもトレーが使われてなくて、隣のレジに並んでいた人は、大きな肉をそのまま手で持っていました。今、考えると私の家から出るごみのほとんどが、食品についているラベルや袋とトレーといった物です。私たちは生活するためにスーパーなどのお店で食品を購入しなくてはなりません。そこで、日本でもそれらのごみとなってしまうものを少しずつでも努力して減らしていけば、ごみの減量につながるのではないかと思います。

私はドイツのボッパルト市に行き、ごみは人々の意識でいくらかでも削減できるということを学びました。元々、ごみになる物が少なくごみとして出た物はしっかりと分別してリサイクルできる物はすると言うことが常識となっていることはすばらしいと思いました。

私たちもそれが当たり前の日常になれるように一人一人がごみ問題について考え、生活していくことが大事だと思いました。



青梅とボッパルトでの、ごみの処理について違いをまとめてみました。

まず、回収方法です。青梅では、有料の半透明なごみ袋を使っています。しかし、ボッパルトでは住宅の密集地は収集袋を使いますが、それ以外は移動式のバケツを使っています。青梅の収集袋の良い点は、中身が見えるので、しっかり分別されたかが分かる点です。ボッパルトのバケツの良い点は何度も使え、しかも、ごみにならない点です。

次に、分別方法についてです。青梅市では分別のガイドブックなどを出して、ごみの分別を呼び掛けています。大体のものは「燃えるもの」か「燃やさないごみ」に分け、そこから燃えるごみ、容プラごみ、燃やさないごみ、粗大ごみ、びんや缶などの資源ごみ、有害ごみに分別します。そして、青梅市や各自治会での資源回収により、一部はごみとして収集されますが、ほとんどは資源として生まれ変わります。

ボッパルトでは、青梅に比べて「ごみ」として出される量は少ないです。なぜなら日本よりも資源として再利用するものが多いからです。

次に、ごみの収集について比較してみました。青梅では、ごみは青梅市が回収していますが、一部を民間業者が回収しています。ボッパルトでは、同じように市が回収していますが、一部を民間業者や慈善団体が回収したり、譲ったりしています。

次は、そのごみの処理費についてです。青梅市では税金と収集袋の代金の中に含まれています。ボッパルトでは、商品の代金に処分費が含まれており、企業が負担しています。

今回、青梅とドイツの違いを比べるために研修をしたことで、青梅の状況を理解し、ボッパルトでの生活に触れることで、違いが見えてきました。

ボッパルト市のできる限り個人や自治体がお金を使わないようにしながら、なおかつ「ごみ」を出さないやり方がすごいと思いました。自分や家族も普段の生活での分別を意識し、「ごみ」を少なくしていきたいです。そして、「ごみ」を減らすことで税金も使わず、環境にやさしくなるよう、青梅でもボッパルトや他国のいい部分を真似して、もっといい街にしていきたいです。

ドイツでのごみの捨て方は日本と少し似ていて、決まった曜日に決まった入れ物に入れて、家の敷地の前に出します。

入れる容器は4種類あって、まず始めに、紙類を入れる青色のバケツ。これは、雑紙や古紙などをまとめたものです。次に、生ごみを入れる緑色のバケツ。3つ目は、ほぼ全てのプラスチック類を入れる指定の黄色い袋。最後に、その他の類に該当しないものを入れる、黒いバケツ。ビンなどは別に回収するようです。

回収されたごみがどうなるかが一番の違いです。まず、生ごみ。日本では燃えるごみとして燃やされてしましますが、ボッパルトでは、腐らせて「たい肥」にし、そのたい肥でまた新しい命を作り出すのです。そして、プラスチック。これもリサイクルされて再資源化されます。

僕はこうした分別の仕方にも、国の違い、文化の違いを感じました。

僕が一番良さを感じたのは、生ごみのリサイクル方法です。日本では生ごみをたい肥にしようと思う人がそもそもあまり多くはありませんが、ボッパルトの人たちにとってはそれが当たり前のことです。生命が再生していくところにとっても感動しました。

日本とドイツ、または他の国との間で、よく似ているところもあれば、まったく違うところもあります。違っているところの中でも、日本が優れていること、ほかの国が優れていること、一長一短があります。

ドイツのリサイクルは日本よりも優れています。そういったところは僕たちがよりよい暮らしをするためにも取り入れていかなければなりません。

他の国のいいところは真似をし、自分たちのいいところを教えあい、悪いところはなるべく改善していけるような世の中になれば、社会全体としてうまくやっていくのではないかと思います。

私が青梅とボッパルトのごみの分別の違いについて、まず驚いたことは、それぞれの家の前に大きなごみ箱があることです。紙ごみ、プラスチックごみ、生ごみ、と分かれていて、そこに集めて収集は、紙ごみ、プラスチックが月1回、生ごみが月2回と、収集日がとても少ないのです。生ごみは紙袋に入れたり、匂いや虫が寄ってくるのを防いだり、家に溜めるのではなく、家の外に大きなごみ箱があることで収集日が少なく済むというドイツのごみ収集の制度は、よく工夫がされていて、とても効率的な方法だと思いました。

さらに、もう1つ驚いたことがあります。それは、ペットボトルにリサイクルマークのようなものが書かれていて、そのマークが書いてあるものは、スーパーなどに持っていくとお金と交換できるということです。日本でも、リサイクルはいろんなところでされていますが、ドイツでは、直接お金に替えることができ、そのことによって人々のリサイクル意識がより一層高まるのではないかと思います。

スーパーに行ったとき、私はエコバックを忘れてしまいました。ドイツにはレジ袋はないので、エコバックが売っていました。エコバックは、とてもたくさん入るのに安く売っていました。これもドイツの人達のリサイクル意識を高める狙いがあるのだらうと思いました。

それから、古着は駐車場に大きな箱があり、貧しい人達に送られるそうです。私は、これはとてもよいリサイクルだと思いました。日本でも古着を貧しい人に送るという活動は、一部のお店などで行われていますが、そのお店で買った服でなくてはいけないなど、いろいろな制限があり、面倒くさくて捨ててしまう人が多いと思います。しかしドイツでは、自分がいらなくなった服を近所にある箱に持って行けば、困っている人の役に立てるので、本当によい制度だと思いました。

こんな風にドイツのリサイクル制度は、日本とは違い、とても進んでいて見習わなければならないと思うところがたくさんありました。日本では、エコセメントや4Rなど、様々な取り組みがされていますが、ドイツにはまだまだ追いつかないと思います。ポイ捨てやモノを大事にする心を持つためには、ドイツのリサイクル意識を見習い、青梅もボッパルトのような綺麗な街になっていけばいいと思いました。



ドイツと言えば、「環境保護」という言葉が浮かんできます。ドイツ国民が皆で環境問題について考えている気がします。資源が有限であることを解かっていて、それを大切に使う国。そして更にユーロ圏が経済危機に陥りながらも、ひとりだけ勝ち抜き、生き抜いている国。それがドイツです。今回、私は、ドイツがユーロ圏で唯一生き残っている理由はどこにあるのかということと、ごみの出し方を関連付けながら見て、考えてきました。

まず、ドイツではごみになるべく出ないように工夫がされていました。ドイツのスーパーに行くとき袋をくれません。袋がほしい場合は買わなくてはなりません。しかも、その袋は日本のようなビニール製ではなく、布です。つまり、日本のようにビニール袋のごみが大量に出にくくなるのです。さらに、日本でもお馴染みのペットボトル。これはドイツにもあります。しかし、日本とは違うところがあります。それは、換金出来るということです。

ペットボトルのラベルに換金出来るというマークがあれば30円位に換金出来るそうです。だからホームステイ先では日本のように捨てることなく、家である程度たまってから換金していました。

そしてごみの出し方です。ホームステイ先で、「ごみ箱はどこですか？」と聞くと、外へ案内してくれました。そこには三つの大きな箱がありました。一つは緑色、二つ目は黒色、そして最後は水色でした。日本のように細かく分別するわけではなく、三通りに分別するだけで良いそうです。更に、日本のごみ袋を使用しないで、そのごみの日になったらその箱を出しておき、ごみ収集車がごみを箱から出し持っていく。箱は繰り返し使用されるのでごみ袋を買う必要もなく、お金が余りかかりません。ビニール袋を燃やして出る有害物質の発生をなるべく防ぐことが出来、環境にもやさしいのです。そして箱はカラフルなので景観も損ねません。むしろおしゃれです。このようなところに、生き残っている理由があるのだらうと私は考えます。

ドイツのごみの出し方に私は感動し感心しました。私たち日本もドイツのこのやり方をみならうべきだと思いました。



ドイツを訪れる前ごみについて考えていた時は、よく環境先進国であるといわれているドイツでのごみの分別方法はきっと徹底しているものだろうと思いました。空港やホームステイ先で見かけたごみ箱は三つに分別されていて、青い袋が古紙、グレーがそのほかのごみ、そして黄色い袋は、グリーンマークというものが入っているごみを入れます。ドイツでは、包装容器のある製品の製造した企業はその製品の包装容器を回収する義務があるそうで、その回収を代行する業者があります。その業者が取り扱う包装についているマークがグリーンマークで、このマークのついている製品のごみは無料で回収してくれて、業者が回収、分別、リサイクルをするそうです。その為、消費者はグリーンマークの製品を買って無料で回収してもらい、その集まった包装容器はリサイクルされ、企業も儲かり、環境にもやさしいという仕組みになっているそうです。

また、スーパーなどに行った際、レジ袋は有料化されていました。なので、ドイツではマイバックを持参することが当たり前のように感じました。ホストファミリーとスーパーに行った際、ホストファミリーの車には、買い物用のカゴが置いてあり、それに買った物をいれて運んでいて、マイバック持参ということが当たり前の世界なのだと感じました。メリットのあるリサイクル方法はすごく画期的な方法だと思いました。けれども、青梅でもリサイクルできる資源は、無料回収をしてくれるので、結局のところ、あまり日本とポッパルトでのごみ分別の差はあまりないのかもしれないかもしれません。分別の仕方というのはあまり青梅とは変わらないように思えました。青梅もすぐくごみの分別には気をつけていると思います。しかし、制度やスーパーの件をみると、ドイツはやはりごみ問題については日本の一歩先を行っていると思いました。日本でもマイバック持参することが最近馴染んできていますし、ドイツのようにそれが当たり前になる世の中になってほしいと感じました。



「ごみ分別からみるドイツと日本の意識の違い」

都立青梅総合高等学校 1年

齋藤 春花

私は今回ドイツに行って、ドイツ人のごみの捨て方に対する意識の高さに驚きを感じました。

大勢の人が集まる街には、道路の端に十メートル間隔位で小さなごみ箱が設置しており、道にはポイ捨てなどもほとんどありませんでした。

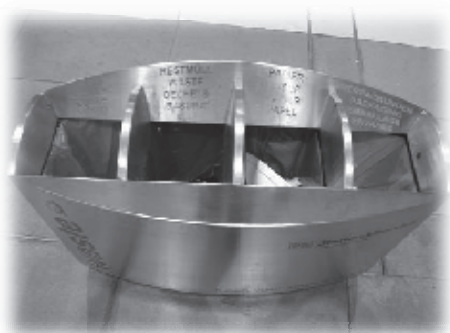
ドイツと比較すると日本は、環境への意識は高まっているものの、例えば、私が住んでいる近くの川にも、家で簡単に捨てることのできるようなごみがたくさん落ちていて、その影響で川の環境が悪くなり、昔はたくさんいた蛍が今では見ることができなくなってしまいました。

ドイツでは、環境問題を教育に取り組んでいるそうです。その教育は幼稚園から始まっていて、幼稚園では分別の仕方、小学校では環境について五感を使って感じさせるために、森遊びや水質調査などを行っているそうです。さらに中学校に上がると、ごみ問題を物理、化学、生物、数学、社会の授業で取り上げ、ごみとは何かという課題を「人間と自然」という大きなとらえ方で教えています。学生時代にそのような教育を受けた結果が、ドイツ人の環境に対する意識の高さにつながっているのだと思います。

ドイツが環境大国と呼ばれるほどに環境対策が本格化したのは、大きな経済成長の後でした。

大きな経済成長によってドイツは、酸性雨と大気汚染で森が次々と枯死、衰弱しました。その反省が今のドイツの環境をつくりあげました。

日本のごみ問題の現状は、とても厳しいものです。日本人がこの問題を解決するためには、ドイツの人々の意識を学ぶべきだと思います。ごみの一つ一つを家庭が細かく分別をし、一人ひとりがごみについて意識を持つ日本になってほしいと私は思います。



5 参考資料

(1) 平成24年度事業スケジュール

月 日	内 容
4月12日(木)	校長会にて市内各中学校へ派遣団員推薦依頼
4月15日(日)	広報おうめ・ホームページ等で公募団員募集開始（5月8日締切）
5月27日(日)	公募団員面接試験実施
5月下旬	市立中学校団員推薦者内定
5月31日(金)	公募団員内定、通知発送
6月17日(日)	第1回事前研修（市長面談等）
6月21日(木)	第2回事前研修（親子研修・派遣事業説明）
7月 8日(日)	第3回事前研修（ドイツ語会話・歌、ソーラン練習等）
7月17日(木)	臨時事前研修1（ドイツの歴史）
7月22日(日)	第4回事前研修（ドイツ語会話等・歌、ソーラン練習等）
7月29日(日)	第5回事前研修（テーマ学習等打ち合わせ）
8月 5日(日)	第6回事前研修（テーマ学習等打ち合わせ）
8月 9日(木)	第7回事前研修（親子研修・団員決定等）
8月10日(金)	臨時事前研修2（青梅のごみ分別について）
8月15日(水)～ 8月22日(水)	ボッパルト市へ派遣
8月30日(金)	第1回事後研修（親子研修・帰国報告等）
9月 9日(日)	第2回事後研修（報告文提出・派遣報告会準備等）
9月23日(日)	第3回事後研修（派遣報告会準備）
10月 5日(金)	派遣報告会 派遣報告書完成

(2) 事前・事後研修の様子

事前・事後研修の様子を団員の感想（一部抜粋）とともに紹介します

第1回事前研修（初めての顔合わせ）



代表として行くので、きちんとした心構えで行くことが大切だということが分かりました。（徳永）

第2回事前研修（親子研修）



（ボッパルトの紹介ビデオを見て）青梅にボッパルトからぶどうの木が来ているのは知らなかったです。青梅の梅の木がドイツで元気に育っていることに感動しました。（下田）

第3回事前研修～第6回事前研修

ドイツ語会話



ドイツ語がこんなに難しいなんて思いませんでした。発音も読むことも大変でしたが、8月に向けてしっかりやりたいと思います。（加藤）

テーマ学習打ち合わせ



たくさん資料を集め、伝わりやすいように言葉を選びたいです。（小野）
しっかりと研修に参加し、しっかりと調べて頑張りたいです。（高橋）

ローズ家の方々と質問タイム&合唱練習



実際にボッパルトに住んでいるローズ家の方々と話せて良かったです。ボッパルトに行くと今度は一人なので緊張しますが、楽しみです。（松林）

よさこいソーラン練習



よさこいソーランも形がほぼ固まっているので、完成度を上げるために頑張ろうと思います。（成宮）

最初は緊張していた団員たちでしたが、このころになると、団員同士の結束も強まり、にぎやかに話し合う姿も見られるようになりました。

第7回事前研修（団員決定通知授与）



全部の研修はあっという間に終わってしまいました。研修を重ねていくにつれてどんどん早くボッパルトへ行ってみたいという気持ちが大きくなりました。（木寄）

全ての研修を終えてようやく私はドイツに行くのだなという実感が出てきました。同時に、一中の代表として行くということの責任感も感じました。（佐藤）

一回一回の研修を忘れずに、ドイツで生かし、帰ってきてからの報告でうまくまとめられるように、しっかり見て体験したいと思います。（羽斗）

臨時研修（ドイツの歴史）



学校で習って知っている話もあったけど、今日はすごく詳しいことまで分かりました。ボッパルトに面しているライン川は歴史上、すごく重要だということが分かり、現地に行ったらきちんと見ておこうと思いました。（野崎）

臨時研修（青梅市のごみ処理）



ごみのことをいろいろ聞いて今まで自分の家でやっていた分別が間違っていたところもあって、ドイツに行く時だけでなく、これからの生活でも役に立つなと思いました。（齋藤）

第1回事後研修～第3回事後研修



帰国し第1回目の親子研修では、ボッパルトに行ってどんなことを学んできたのか、保護者や団員の前で一人ずつ発表しました。



2回目、3回目の事後研修では、派遣報告会に向けての発表の準備をしました。

(3) 派遣報告会の様子



冒頭に、団長である青梅市長と御来賓を代表して青梅市議会の浜中議長から御挨拶をいただきました。



まずは、リーダーである成宮さんが、皆さんの前で挨拶をしました。

その後は団員たちがそれぞれ自己紹介をし、自分がこの青少年友好親善使節団になぜ応募したのか、そして、ポッパルトでどのような経験をしてきたのか、ポッパルトに行くことができた感謝とともに、会場の皆さんに伝えました。



自己紹介を終えると、写真をスクリーンに表示しながら、事前研修・事後研修の内容、派遣期間中の日程の説明や民泊家庭の家族との出来事などを報告しました。皆さんの前で報告をすることに緊張している団員もいましたが、全ての報告を終えると会場からは温かい拍手をいただき、団員たちはほっとした表情をうかべていました。



最後は派遣報告会にいらっしゃった皆さん
を団員全員でお見送りしました。



派遣報告会終了後、最後に全員で記念撮影をしました。

(4) 派遣団員募集要項

姉妹都市ボッパルト市への青少年友好親善使節団



派遣団員募集要項



今年の夏、姉妹都市ボッパルトへ！

あなたも参加してみませんか。

(第14回ボッパルト市への青少年友好親善使節団派遣事業 主催：青梅市)

【事業目的】 青梅市の姉妹都市ドイツ・ボッパルト市へ青少年を派遣することにより、両市の友好親善を深めるとともに、国際的視野に立つ青少年の育成を図ることを目的としています。

【募集対象】 青梅市在住の高校生および市立中学校在籍以外の中学生

※市立中学生は各学校での募集となります。

【派遣先】 ドイツ連邦共和国ボッパルト市

【派遣期間】 平成24年8月15日（水）から8月22日（水）までの8日間

【応募資格】 1 派遣時に、中学2年生から高校3年生であること（今までにこの派遣事業でボッパルトへ派遣された方は除きます。）

2 心身ともに健康で、協調性に富み、規律ある団体行動ができること

3 派遣後も民泊受入れ等で青梅市の国際交流事業や姉妹都市交流事業に協力できること

4 青梅市が実施する事前研修（8回程度）および事後研修（3回程度）に参加できること（事前研修を修了した方が、正式に団員となります。）

5 帰国後に開催する派遣報告会に参加できること（9月下旬予定）

【募集人員】 若干名

【費用】 派遣にかかる航空運賃、空港施設使用料、空港税、燃油サーチャージ、海外旅行傷害保険料、市役所・成田空港間送迎バス代は青梅市が負担します。それ以外の個人で必要な経費は団員本人の負担となります。（たとえば、パスポート取得に関する費用等）

【宿泊】 ボッパルトでの宿泊は、全員ホームステイとなります。

【選考】 作文審査と面接

【選考結果の通知】 6月11日までに応募者全員に通知します。

【作文】 所定の下稿用紙に1000字から1200字の作文を作成し、申込書と一緒に提出してください。

【作文のテーマ】 ①「国際交流あるいは、国際理解について」

②「ドイツ（ボッパルト）に行って学びたいこと」

※どちらか1つ選んで書いてください。

【面接日と会場】 平成24年5月27日（日）

午前9時から（予定） 各応募者の面接時間は別途連絡します。

青梅市役所4階403会議室（控室：市役所4階402会議室）

【申込方法】 受付期間内に所定の申込書に記入の上、写真を貼付し、作文と一緒に市役所本庁舎4階秘書広報課広聴・国際交流担当窓口へ直接持参または郵送してください。（作文は自筆に限ります。）

送付先：〒198-8701 東京都青梅市東青梅1-11-1

青梅市役所企画部秘書広報課広聴・国際交流担当

【申込書・原稿用紙】 青梅市のホームページからダウンロードできます。また、市役所受付、秘書広報課広聴・国際交流担当窓口、各市民センター、中央図書館で配布します。

【申込受付】 平成24年4月17日（火）～平成24年5月8日（火）（郵便の場合は、5月8日の消印有効）
午前8時30分から午後5時15分まで（ただし、土・日・祝日は休み）

【事前研修】 団員内定者の第1回目の研修は、6月17日（日）午前10時から青梅市役所4階403会議室で行います。

第14回青梅市青少年友好親善使節団

＜派遣の記録＞

平成24年12月発行

発行・編集 青梅市秘書広報課

青梅市東青梅1-11-1

印刷 株式会社 成和印刷